

【報告】

一橋大学図書系職員向け電子リソースに関する勉強会の実施報告

柴田育子（学術情報課雑誌情報係）

一橋大学学術・図書部

1. はじめに

2012年10月から2013年1月まで6回に亘り、本学学術・図書部学術情報課雑誌情報係は、学内図書系職員向けに電子リソース¹に関する勉強会を実施した。本報告は、その勉強会について経緯と実施内容をまとめたものである。

筆者は、国立情報学研究所実務研修生として2011年9月～2012年3月の7か月間、大学図書館コンソーシアム連合²（通称 JUSTICE）事務局に勤務した。2012年4月に本学雑誌情報係に戻り感じた点が二点ある。一点目は図書館全体で電子資料に関する基礎知識の底上げが急務であるということ、二点目には、現在の図書系職員は電子リソースに関してどの程度理解し、今後どのような知識が必要とされるのか、ということである。特に後者に関しては、筆者自身が JUSTICE へ研修に行く前の自分を振り返り、電子リソースに関する知識や関心をほとんど持っていなかった経験に基づく疑問である。

本学では、電子リソースに関する業務は、主に導入／契約については雑誌契約担当者が行い、利用者への案内等はレファレンス担当者が主に行っているが、その知識等は業務担当者、もしくは個人的な興味を持つ者に偏りがちだった。特に本学の場合は、社会科学系の大学ということで、電子リソース導入が他の総合大学や理系の大学と比べて少ないため、冊子体の需要がまだまだ多かった。それゆえ、筆者自身も雑誌担当でありながら電子リソースに関する知識は断片的であった。また、詳しく知ろうにも電子リソースの契約や利用には専門用語が多く、従来の冊子体契約と概念も異なることから、理解がなかなか進まなかった。

そういった状況で筆者は JUSTICE 事務局で研修を行い、電子リソース契約の世界へ飛び込むこととなった。研修期間中の2012年3月には、JUSTICE 事務局で『電子資料契約実務必携』を刊行した。これは電子リソースや契約に関するノウハウを日本語でまとめた冊子で、JUSTICE 参加館向けに作成したものである。この背景には、電子ジャーナル等の契約に関する知識が追いつかないまま、業務を遂行しなくてはならない個々の大学図書館職

員の現状があり、その彼ら／彼女らのためのマニュアルの必要性を JUSTICE またはその前組織³が以前から強く感じていたことに起因する。

研修終了後、筆者はようやく刊行できた『電子資料契約実務必携』を本学のために役立てたいと考え、これをテキストとし、本学図書系職員向けに勉強会の実施を試みた。

2. 事前アンケート

本学で電子リソースに関する勉強会を実施するにあたり、現職の図書系職員がどれだけ電子リソースに関して意識、知識を持っているか事前にアンケートを行った。これは、筆者が研修後に「現在の図書系職員は電子リソースに関してどの程度理解し、今後どのような知識が必要とされるのか」と疑問をもったことに基づいている。また、勉強会を企画するにあたり、図書系職員の電子リソースに対する意識、理解度やニーズを事前に把握する必要を感じ、アンケートを実施した。

2012年9月に本学図書系職員（中央図書館及び研究所資料室等）に対して、アンケートへの協力をメールで依頼した。質問は大まかに4項目に分け、①電子リソースに関する興味について、②電子リソースに関する用語について、③電子リソースに関する勉強会について、④回答者の所属について、とした。回答者は常勤、非常勤職員を問わず、無記名とした。回答方法は Web 上の SurveyMonkey⁴というサービスを利用した。アンケートの実施の結果、図書系職員 59 名中 48 名から回答が得られた。以下アンケートの結果と考察を質問項目毎に報告したい。

2.1. 電子リソースに関する興味について

電子リソースに関する興味の調査項目では「電子リソース（電子ジャーナル、電子ブック、データベース）について、どの程度理解していると思いますか」という問いに対して、回答者 48 名中 36 名が「そんなに理解していない」「理解していない」等と回答した（図 1）。一方で「今後、図書館員は電子リソースについて理解する必要があると思いますが」という問いに対しては、48 名全員が「そう思う」という回答をした。一概には言えないが、電子リソースに関する知識等はこれから必要と感じつつも、現状はまだ理解が追いつかないという職員が多いことが分かる。

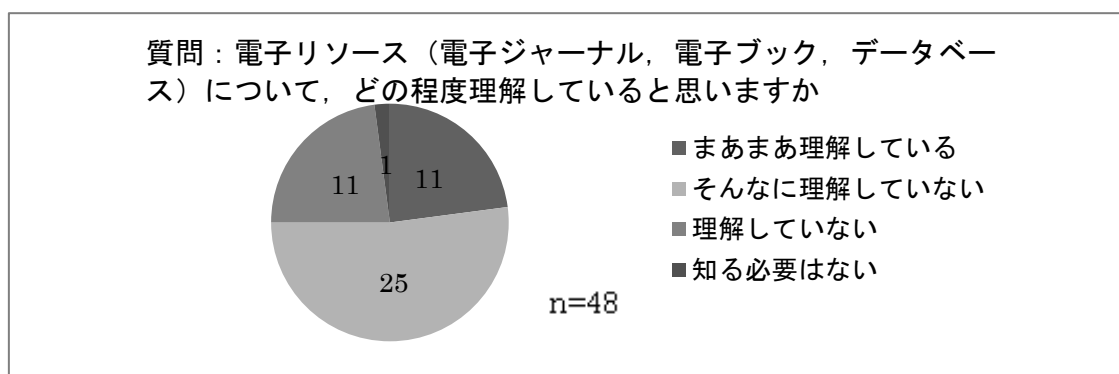


図1 アンケート調査の結果（一部）：電子リソースに関する興味について

2.2. 電子リソースに関する用語について

電子リソースに関する専門用語の認知／理解度を計る質問をしてみた。ある特定の言葉を「よく知っていると思う」「まあまあ知っていると思う」「なんとなく知っている程度だ」「全く知らない（分からない）」で選択回答してもらった（表1）。

質問に挙げた「カレント・サブスクリプション」「移管誌（トランスファー・タイトル）」「ポスト・キャンセレーション・アクセス」「ダーク・アーカイブ」等といった言葉は、半数以上が「全く知らない（分からない）」だった。また、「アグリゲータ」「ビッグ・ディール」「ウォークイン・ユーザー」については、約4割の回答者が「全く知らない（分からない）」だった。唯一、「オープン・アクセス」という言葉が半数以上「よく知っていると思う」「まあまあ知っていると思う」と回答した。

表1 アンケート調査の結果（一部）：電子リソースに関する用語について

質問：この用語に関してどの程度知っているかご回答ください。

	よく知っている と思う	まあまあ知っ ていると思う	なんとなく知っ ている程度だ	全く知らない (分からない)	無回答	総計
アグリゲータ(Aggregator)	3	5	16	22	2	48
ビッグ・ディール(Big Deal)	1	16	9	20	2	48
カレント・サブスクリプション (Current subscription)	2	6	10	28	2	48
ディスカバリー・サービス (Discovery service)	0	12	11	23	2	48
移管誌(Transfer title)	3	5	7	31	2	48
ウォークインユーザー(Walk-in-user)	6	14	5	21	2	48
ポスト・キャンセレーション・アクセス (Post cancellation access)	1	2	5	38	2	48
オープン・アクセス(Open Access, OA)	5	21	15	5	2	48
ダーク・アーカイブ(Dark archive)	0	7	9	30	2	48
PDA (利用者駆動型購入方式; Patron- Driven Acquisition)	0	3	7	36	2	48
					数字は回答数	n=48

2.3. 電子リソースに関する勉強会について

次にニーズを把握するため、勉強会の内容案を作成し、どのテーマに興味があるか選択してもらった。回答は複数回答可にした。勉強会案は以下の8つのテーマに分けてみた。

また【】内はそのテーマで使用されるキーワード等を表している。

- ① 電子リソースとは？【概論：電子ジャーナル、アグリゲータ、電子ブック、データベース等についての入門】
- ② 電子リソースの購入【購入方法（ビッグ・ディール、サブジェクト、タイトル毎、ペーパービュー（PPV））、購入対象（カレント、バックファイル）】
- ③ 購入した電子リソースが使えるようになるまで【アクティベーション、リンクリゾルバ（SFX）、ディスカバリーサービス】
- ④ 電子リソースのアクセス権と利用【ウォークインユーザー、ILL、トランスファー・タイトル、ローリングするアクセス、エンバーゴ、利用統計（COUNTER）】
- ⑤ 電子リソースを保存する【ライトアーカイブ、ダークアーカイブ、CLOCKSS、ポスト・キャンセレーション・アクセス、ローカル・マウンティング】
- ⑥ 電子リソースの発信【SPARC、オープンアクセス、リポジトリ（紀要）】
- ⑦ 電子リソースに関する最近のトレンド【一橋大学の電子リソース契約の実態、PDAモデル、ビッグ・ディールからPPVへのシフト、冊子体の共同保存、ERDB】
- ⑧ 一橋大学の電子リソース契約の実態や問題

上記テーマにおいて、回答者の関心に大きな偏りやばらつきはなかった。最も回答数が多かったのは、①の入門であった。また、⑦の最近のトレンドに関するテーマも回答者の関心が高く、6割以上の回答があった。

この他にどのようなテーマがあれば良いか、と自由記述形式で尋ねたところ、出版社等との交渉について、電子リソースに関する話題についていく情報入手方法、国内出版社の電子書籍と大学図書館との関係について等の回答があった。

上記アンケートの結果から、もし電子リソースに関する勉強会を行うならば、購入、契約、利用のあらゆる面で一定のニーズがあることが分かった。また、本学の電子リソースの購入、利用の実態にも関心が高いことが分かった。

3. 電子リソースに関する勉強会

事前アンケートの結果をうけて、勉強会の構成を練り直してみた。アンケート結果を整

理すると、回答者は、①基礎知識の習得を望んでいる者が多数であること、②電子リソースの購入、利用などまんべんなく知識をカバーしたいこと、③本学の現状を知りたいこと、④変化の早い電子に関する話題にどのようについていくか関心が高いこと、の4つの特徴があるのではないかと考えた。勉強会の方法としては、テキストとして使用予定の『電子資料契約実務必携』に沿って章立て順に行うことも検討したが、結果として以下のような構成とした。

第1回「電子リソースとは？【概論：ジャーナル、アグリゲータ、ブック、データベース等について入門】」

第2回「電子リソースの利用準備（アクティベート）、アクセス権と利用統計」

第3回「電子リソースの購入／契約と一橋大学の電子リソースの状況」

第4回「電子リソースに関する問題の総括」（第1～3回の復習を含む）

第5回「電子リソースの発信（OAとSPARC、リポジトリ）」

第6回「電子リソースに関する最新のトレンド（保存を含む）」

また、こういった勉強会に参加してもらうには少しでも刺激的なタイトルがあったほうが良いという意見もあり、タイトルをつけた。各回のタイトルと実際の参加人数、『電子資料契約実務必携』における範囲は表2の通りである。

表2 勉強会の実施記録

回次	タイトル	参加人数	『必携』範囲
1	電子ジャーナルとアグリゲーターとデータベースの違いを説明出来る？ ～電子リソース基本講座～	24人	第2章 電子ジャーナル 第3章 データベース 第4章 電子ブック
2	電子リソース導入後から利用者が使うようになるまで。 ～買った後、図書館員は一体何を準備し、何を知っておかなくては行けないのか～	20人	第5章 電子資料の契約とライセンス 第6章 電子資料の契約情報管理と統計 第7章 電子資料の利用者への提供
3	電子リソース、一橋で何をかう？	23人	第2章 電子ジャーナル 第3章 データベース 第4章 電子ブック
4	そもそも電子リソースは何故値上げするのか？ ～出版社だけが原因！？値上げの実態と「安く買っている」はずの出版社交渉～	21人	第1章 電子資料をめぐる近年の状況
5	OAって本当に図書館にとって嬉しいこと？ ～アンケート回答者の半分以上が「まあまあ知っている」OAの本当の話～	25人	第1章 電子資料をめぐる近年の状況
6	電子リソースのこれから ～加速する電子化についていくために今知っておくべきこと、知る方法～	17人	第7章 電子資料の利用者への提供
番外編	リンクリゾルバのしくみ	32人	なし

勉強会は3～4週間おきに1回45分程度で計画した。講師は、雑誌情報係と学術サービス課コンテンツ系の職員で担当することとした。基本的には、15～20分程度は講師が話し、後半30分程度は参加者とのフリーディスカッションに充てたいと考えた。これは、勉強会が座学のみで終わるのではなく、参加者が電子リソースに関する知識の取得に苦勞している現状や疑問を共有して欲しいというねらいがあった。

参加者には『電子資料契約実務必携』の当該ページを指定し、事前に読んでもらい、分からない単語などは巻末にある用語集も適宜参考にするよう連絡した。また、各回の終了後にWebでアンケートを実施し、内容を評価してもらった。

表2のとおり、各回20～25名前後の参加があった。勉強会の構成としては講義の時間を20分以内と考えていたが、なかなか簡潔にはまとめられず、実際には30分～40分程度講師が話し、20分程度ディスカッションや補足事項を説明することとなった。また、いずれの回も、全体的な説明と共に、本学の事例にも触れるよう講師に依頼した。

事後アンケートでは、勉強会の時間は適正か、講師の説明は明確か、内容を理解できたかどうか等を参加者に評価してもらった。また、第1～3回実施後にアンケート結果に基づき、さらに説明が必要と思われるキーワードに関しては、第4回の勉強会で補足説明をした。例えば、ナレッジ・ベース (Knowledge Base)、カレント・サブスクリプション (Current Subscription)、エンバーゴ (Embargo)、SUSHI (Standardized Usage Statistics Harvesting Initiative) 等である。

また、本学で導入しているリンクリゾルバの仕組みと使い方について、職員からの要望により、利用者対応業務の職員向けに番外編として勉強会を開催した。

4. 勉強会を開催して

国立情報学研究所での実務研修を経験して強く感じたのが、自分自身がいかに電子リソースや学術情報流通の理解に疎かったか、ということである。電子リソースにまつわるニュースに触れるたび、このままでは取り残されてしまうのではないか、という危機感があったが、「自分には関係ないだろう」と耳を塞いでいたことは否定できない。実務研修を経験して、自分の電子リソースにする理解を深めただけでなく、客観的に「なぜ疎かったのか」「これからどうすれば良いか」ということを考えるきっかけになった。

『電子資料契約実務必携』がJUSTICE参加館に配付されると、出版社や図書館以外からも問い合わせがあったと聞く。これまで日本語で書かれた、図書館の電子リソースに関す

る情報はまとまったものがなかったのは先述の通りであるが、こういった資料が必要とされている現状を改めて認識した。

勉強会を企画／実施して感じたことは、常勤・非常勤職員に拘わらず、電子リソースに関する関心が高いということである。しかし、現状として電子に関する知識は断片的にあっても、あるストーリーをもって、系統立てて理解する機会や時間を得にくいということも分かった。また、筆者も一部講師を担当したが、参加者にいかに分かりやすく理解してもらうか非常に難しいと感じた。その点では、今回事前にアンケートを実施しニーズ調査を行ったことは、職員の理解度や希望にあわせて企画をアレンジする助けになったと思う。

参加者の反応として、これまで電子リソースに関して苦手意識や、なんとなくの理解で済ませていたが、基礎知識をつけることができたとの声があった。また、今後学術情報流通や電子リソースの現状を注視していきたい、という積極的な態度も見受けられた。

反省点としては、勉強会の雰囲気づくりに力を注げなかったことがある。同じ職員同士が、講師と生徒という関係なので、分からない言葉の意味や、素朴な疑問等が参加者から講義中にでるのではないかと思っていたが、なかなか言いやすい場の雰囲気を整えられなかったのではと若干不安が残る。さらに、事後アンケートで挙げた新たな質問等に、素早く反応できず参加者の疑問が解決されないまま、次の勉強会を迎えることが多々あり、実施者として反省すべき点である。

電子リソースに関する勉強会は、2012年度きりの企画ではあるが、これを機に職員が少しでも電子リソースに興味をもち、利用者のサービスに役立って貰えたらと考える。

[謝辞]

この勉強会の企画から実施に至るまで、さまざまな方のご意見をいただきました。ありがとうございました。また、講師を務めてくださいました、阪口幸治コンテンツ係長、小野亘雑誌情報係長、村井しのぶ雑誌情報係員にもお礼申し上げます。

¹ 本稿では、「電子リソース」とは、電子ジャーナルや電子ブック、データベースのことを指すこととする。

² 大学図書館コンソーシアム連合（略称、JUSTICE: Japan Alliance of University Library Consortia for E-Resources）は、これまであった国立大学図書館協会コンソーシアム（JANUL コンソーシアム）と公私立大学図書館コンソーシアム（PULC）の統合による新たなコンソーシアムとして、2011年4月1日に誕生し、電子リソース共同購入のための出版交渉等、日本の研究における学術情報を安定的・継続的に確保・提供するた

めの活動をしている。

大学図書館コンソーシアム連合. (オンライン), <http://www.nii.ac.jp/content/justice/>, (参照 2013-01-31).

³ 「前組織」とは、国立大学図書館協会コンソーシアム (JANUL コンソーシアム) と公立大学図書館コンソーシアム (PULC) を指す。また、国立大学図書館協会学術情報流通改革検討特別委員会 (平成 21～24 年度に活動) でもマニュアルの作成が検討されていた。

⁴ SurveyMonkey. (オンライン), <http://jp.surveymonkey.com/>, (参照 2013-03-18).

[Report]

Report of a Series of Seminars on E-resources for Hitotsubashi University Librarians

Shibata, Yasuko.

Serials Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information,
Hitotsubashi University